



加比の理

定理. n を正の整数とする. 実数 a_i, b_i, p_i ($i = 1, 2, \dots, n$) に対して,

$$\frac{a_1}{b_1} = \frac{a_2}{b_2} = \dots = \frac{a_n}{b_n} = k$$

が成り立つならば,

$$\frac{p_1 a_1 + p_2 a_2 + \dots + p_n a_n}{p_1 b_1 + p_2 b_2 + \dots + p_n b_n} = k$$

が成り立つ.

証明. 仮定から, $a_i = kb_i$ ($i = 1, 2, \dots, n$) が成り立つので,

$$\frac{p_1 a_1 + p_2 a_2 + \dots + p_n a_n}{p_1 b_1 + p_2 b_2 + \dots + p_n b_n} = \frac{k(p_1 b_1 + p_2 b_2 + \dots + p_n b_n)}{p_1 b_1 + p_2 b_2 + \dots + p_n b_n} = k$$

が成り立つ. □

例. $\frac{a}{b} = \frac{c}{d} = \frac{e}{f}$ のとき,

$$\frac{a + c + e}{b + d + f} = \frac{a}{b}$$

が成り立つ. これは, 上の定理 (加比の理) の $n = 3$, $p_1 = p_2 = p_3 = 1$ の場合である.

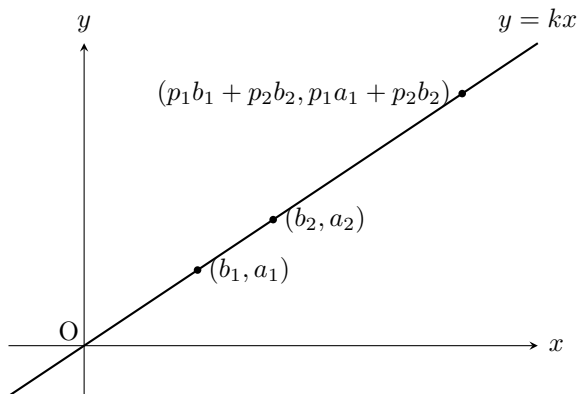
.....
加比の理の幾何学的な意味を知っていることは有用である.

$$\frac{a}{b} \longleftrightarrow y = \frac{a}{b}x \text{ のグラフの傾き} \longleftrightarrow \text{2点 } (0, 0), (b, a) \text{ を通る直線の傾き}$$

という対応を考えることで, 条件式を幾何学的に捉えることができる.

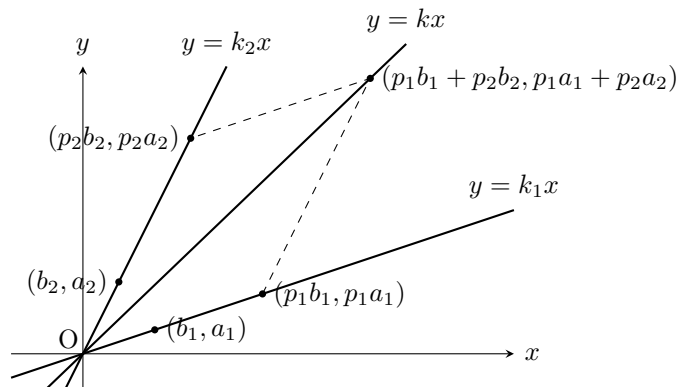
加比の理のイメージ

$\frac{a_1}{b_1} = \frac{a_2}{b_2} = k$ は, 3点 $(0, 0), (b_1, a_1), (b_2, a_2)$ が, 同一直線 ($y = kx$) 上にあるということであり, このとき, 点 $(p_1 b_1 + p_2 b_2, p_1 a_1 + p_2 a_2)$ も同じ直線上にあることがわかる.



加比の理 (不等式版) のイメージ

$k_1 = \frac{a_1}{b_1} < \frac{a_2}{b_2} = k_2$, $\frac{p_1 a_1 + p_2 a_2}{p_1 b_1 + p_2 b_2} = k$ とすると, 直線 $y = kx$ は, 下図のような平行四辺形の対角線である. 直線の傾きを比較すると, $k_1 < k < k_2$ が従う.



加比の理の不等式版を紹介する。

定理. n を正の整数とする. 正の実数 a_i, b_i, p_i ($i = 1, 2, \dots, n$) に対して,

$$\frac{a_1}{b_1} \leq \frac{a_2}{b_2} \leq \dots \leq \frac{a_n}{b_n} \quad (1)$$

が成り立つならば,

$$\frac{a_1}{b_1} \leq \frac{p_1 a_1 + p_2 a_2 + \dots + p_n a_n}{p_1 b_1 + p_2 b_2 + \dots + p_n b_n} \leq \frac{a_n}{b_n}$$

が成り立つ. 等号が成立するのは, 仮定 (1) の等号がすべて成り立つときである.

証明. $i = 1, 2, \dots, n$ に対して, $\frac{a_i}{b_i} = k_i$ とおくと, $a_i = k_i b_i$ であり, 仮定から,

$$k_1 \leq k_2 \leq \dots \leq k_n$$

が成り立つ. これから, $j = 1, 2, \dots, n$ に対して,

$$p_i k_1 b_i \leq p_i k_j b_i \leq p_i k_n b_i$$

であることに注意すると,

$$\frac{p_1 a_1 + \dots + p_n a_n}{p_1 b_1 + \dots + p_n b_n} = \frac{p_1 k_1 b_1 + \dots + p_n k_n b_n}{p_1 b_1 + \dots + p_n b_n} \begin{cases} \leq \frac{k_n (p_1 b_1 + \dots + p_n b_n)}{p_1 b_1 + \dots + p_n b_n} = k_n \\ \geq \frac{k_1 (p_1 b_1 + \dots + p_n b_n)}{p_1 b_1 + \dots + p_n b_n} = k_1 \end{cases}$$

と評価できる. 等号が成り立つのは, $k_1 = k_2 = \dots = k_n$ のときである. □

例. a, b, c, d を正の実数とする. $\frac{1}{2} < \frac{a}{b} < \frac{c}{d} < 3$ のとき, 次が成り立つ.

$$\frac{1}{2} < \frac{a+c+5}{b+d+5} < 3$$

これは, (上の定理の証明と同様に) 次のように示すことができる:

$$\frac{1}{2} = k_1, \quad \frac{a}{b} = k_2, \quad \frac{c}{d} = k_3, \quad 3 = k_4$$

とおくと, $1 = 2k_1$, $a = k_2 b$, $c = k_3 d$ であり, 仮定より, $k_1 < k_2 < k_3 < k_4$ が成り立つ. よって,

$$\frac{a+c+5}{b+d+5} = \frac{2 \cdot 1 + a + c + 3}{2 \cdot 2 + b + c + 1} = \frac{2 \cdot 2k_1 + k_2 b + k_3 c + k_4}{2 \cdot 2 + b + c + 1}$$

は次のように評価できる.

$$\frac{1}{2} = k_1 = \frac{k_1 (2 \cdot 2 + b + c + 1)}{2 \cdot 2 + b + c + 1} < \frac{2 \cdot 2k_1 + k_2 b + k_3 c + k_4}{2 \cdot 2 + b + c + 1} < \frac{k_4 (2 \cdot 2 + b + c + 1)}{2 \cdot 2 + b + c + 1} = k_4 = 3$$

これから結果が従う.